

はじめに

和歌山大学教育学部附属小学校長 松 浦 善 満

豊かな教育実践を支えるもの—研究紀要の役割について—

すぐれた学校、伸びていく学校には「豊かな教育実践」を支える「研究紀要」や「研究誌」が必ず発行されている。教育実践は「確実性」と「不確実性」の両面をもっているため、教師は常に自己の実践の省察（reflection）に迫られる。そこで「研究誌」や「研究紀要」は教師各自の実践の総括の場であるとともに、同時に本校の実践そのものを外部に公開し・評価を得る絶好の場にもなるのである。しかも現在のように教育改革に関していくつもの風（嵐といってもよい）が学校現場に押し寄せるもとでは、教師自身の専門職アイデンティティーを支える上でも「実践の総括」と「研究活動」の場がますます重要性をもってくる。

附属小学校では毎年全員が研究授業を行い、夏休み前と秋に公開研究会を開催している。その他、複式授業研究会（6月）、ICT授業研究会（2月）も開催している。

とりわけ「学びの共同体」創りで活躍されている佐藤先生の来校を機に教師間では今までにない教育実践研究への議論が始まっている。例えば「子どもの学びの成立と授業の成立をどう統一できるか」といった難問（アポリア）にも取り組みだしている。しかしながら、それは山登りに例えればまだ2合目か3合目の議論でありさらに高い峰に達するには研究と研鑽とが不可欠になっている。

本「研究紀要」には個々の教師の授業実践を通して、子どもとの格闘、教材との格闘がリアルに語られているが、今後は、紀要の内容と形態に工夫を加え、各教科の研究開発や学校経営に関する提案、内外の教育実践究を紹介する論文も掲載できることを期待している。

2007年3月